四谷の
千枚田だより
第63号

第十四回全国棚田(千枚田)サミット参加報告

期　日　十月十六日―十八日
開催地　長崎市(大中尾棚田)
　　雲仙市(清水棚田)

今回のサミットは初の二市による共同開催で、開催期間も三日間と長く、希望者を募った結果、鞍掛山麓千枚田保存会員六名が参加した。十六日、〔長崎市〕基調講演「みんなで語ろう、棚田の未来」東京農工大教授千賀裕太郎氏に続いて長崎市立神浦小学校児童の「ふるさとの風景・棚田」では地域の方の指導で塩水選から脱穀までの一連の米作りを通した事例発表。

空缶に灯油で灯された光景

現地見学の大中尾棚田は面積八ヘクタール、約四百八十枚で横長のやや扇状の田んぼで構成されている。次世代に引き継いでいくために、大中尾棚田保全組合を組織し、都市と農村の交流事業(オーナー制度)にも取り組んでいる。

棚田に三千六百個の灯りが夕闇に輝いた光景は圧巻であった。

十七日、〔雲仙市〕現地見学の清水棚田は横長で、「手植えの昔は、向こうまで行く間にイヤになっちまう・・家の田んぼはアッという間に植えちゃえる」などと負け惜しみを語り合った。午後は第一分科会：棚田と環境・教育～棚田で遊ぼう・棚田で学ぼう～ 第二分科会：一般市民参加による棚田保全～みんなで創ろう・棚田の未来～ 第三分科会：地域づくりと棚田の継承～地域の宝を次世代へ～ 第四分科会：棚田地域での生産と販売戦略～安全・安心な食べ物を食卓へ～ 第五分科会：百姓と共に語ろう日本の農業～「近代化を斬る」～ の五分科会が開かれた。

全体交流会では、さすが、観光立県長崎！旅館の女将をはじめ、各食材名店、地元ボランティア団体が「これでもか！」の接待に、全国の百姓、関係者も雰囲気の良さから「おらが、棚田は日本一」に話しが弾んだ。

十八日、雲仙市立千々石第二小学校児童の棚田へ出掛けて観察や実験をし、まとめた「出会い・発見・ふるさとの宝」の発表があった。

千三百人の棚田関係者が一堂に会し、お互いに情報、交流を深め、棚田保全に意欲を駆られるサミットへの参加は「四谷の千枚田」を核にむらづくりに励む、大きな勉強の場であったことを報告します。また、参加について、理解(助成)のある市民の皆さんにお礼申し上げます。

千枚田視察

十月二十二日、新城市議会経済環境部会管内視察の一環として同委員会一行七名が千枚田を訪れ、「鞍掛山麓千枚田保存会の取り組みと今後の活動」について(舜)を交えた勉強会が開かれた。

まず、概要説明で一戸あたりの耕作面積十二アールと少なく生産性に欠けるが、先祖の遺産として、また、訪れる大勢の方達によい環境を提供しようと耕作者は棚田の保全に頑張っている。

保存会六名が市の助成を受け棚田サミットに出席。全国の棚田の百姓や関係者が一堂に会し、よい情報収集ができた。来年の十日町サミットにはバス一台で参加する気運である。

サミットで獲得した事業「中山間地域等直接支払制度」、「棚田地域等緊急保全対策事業」、「ふるさと・水と土保全推進事業」、「景観的文化財」等々

販売米については、知名度も高くなり、米屋や都市部の人達からの打診は結構あるが、十俵を集めるのに苦慮した。販売価格は、一俵(六十kg)一万六千五百円が提示されている。

委員の意見・・それは、安い。この厳しい条件と湧き水、ハザ架け天日干しの環境に優しい貴重な米がこの価格では安い。

※後日、米屋にこのことを話し、今年は五百円アップ、来年はまた考えていただくことになった。

保存、保全に企業導入などの考えについて、現在は三グループが耕作している。本日、たった今、一グループの撤退の意思表示があった。地元の耕作者の平均年齢は六十才と全国の棚田でも若い層で占めているが、安気ではおれない。問いについては有り難い提案として前向きに受け止める。

行政については、都市交流、むらづくりなど、非常に好意的な指導、支援をいただいている。おかげで、県や国の機関からも温かいご指導を戴き、よい支えになっている。

後記：当所、新城市にもこんな所があるだげな、一回、見とかにゃあ・・と、思っているくらいで迎えた。が、委員の先生方は熱心で、ＩＣレコーダー片手に次々と質問、提案に(舜)の日頃使わない脳味噌もフル回転。先生方も「四谷の千枚田」をこんなに思っていてくれるんだと、心地よい疲れを感じた。

横浜ゴム

横浜ゴム新城工場は CO2 削減に工場敷地内にドングリ等を植栽、「千年の杜づくり」を展開している。

その一環として昨年に続き本年も環境に優しく育てられた四谷の千枚田の稲藁を高単価で購入していただいた。

千枚田も有名になり、多方面からねぎらいの言葉は多々頂いているが、訪れる皆さんに粗相のないよう、よい環境、風景を提供しようと頑張っている耕作者に直接波及する支援は地元優良企業の横浜ゴム新城工場のみであり、生産性の低い我々耕作者は「ありがたい」ご褒美を頂いたと感激の至りである。

キジの放鳥

愛知県では、例年、日本キジの放鳥を行っています。新城市では十月二十三日、愛知県猟友回新城支部と協力し、自然保護及び愛鳥教育の一環として四谷の千枚田のふれあい広場で連谷小学校生の手で二十羽の放鳥が行われました。

地域活動

十一月二日、方瀬・与良木集落の生活道路に覆い被さる木々の枝打ち作業が方瀬組の皆さんと近隣の有志で行われた。

便(稲目トンネル)がよくなりお役目御免で、疎外化の憂き目に晒された生活路を地域住民が自らの手で守る善いお手本が示された。

追記：連谷お助け隊が手始めとした環境整備活動が集落に浸透。多くの集落での取り組みが感じられる。なお、環境整備活動等の作業機材は「愛知県ふるさと指導員活動支援物資」を活用されたい。 (舜)保管

千枚田調査

十月二十四日、市鳳来総合支所観光課の紹介で名古屋工業大学の学生二名が千枚田を訪れ、「千枚田の歴史と保存について」の調査が行われ、(舜)が対応しました。

ふるさと農林水産フェア

十一月七日～九日、名古屋吹上ホールに於いて～おいしさ満載・愛・地産～「ふるさと農林水産フェア」が開催され、約五万人の来館者で賑わった。

四谷の千枚田も、都市交流事業「三河の山里ツーリズム」等の受け入れ実績と千枚田の位置づけから同イベントに出展参加、「湧き水、天日干しの棚田米」と農閑期に作成したおっ母さんたちの「御殿手まり」を展示販売。棚田米はコップ10招致に活用された四谷の千枚田全景の写真と朝日新聞「街道新話・はざ架けの棚田」を掲げ、来館者はその光景に見入り、同情(大変さ)と羨望(環境・景観)のうち完売した。

ふるさと水と土研修会

十一月十八日～十九日、三島市民文化会館に於いて平成二十年度 ふるさと水と土基金全国研修会が開催、愛知県ふるさと水と土指導員の小山舜二が研修を受けます。

第三回東京棚田フェスティバル

十一月二十二・二十三日、NPO法人 棚田ネットワーク主催の棚田フェスティバルが東京都恵比寿のSPAZIOで開催され、全国九つの棚田地域の保存会のメンバーが集結、棚田の自慢話や保全、地域おこし等々、みんなで輪になって話す「棚田をつなぐ井戸端会議」に同会員の小山舜二が参加します。

発　行　平成二十年十一月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
文　責　小山舜二
S-koyama@tees.jp